

2022年1月2日（日）主日朝礼拝説教

『命との出会い』井上隆晶牧師

Ⅱコリント5章14～17節、ルカ福音書2章22～38節

①【生かされた者として、新しい年をどのように生きるか】

2021年はコロナ感染症の大流行によって大変な一年でした。年末に思ったことは、何人もの人が亡くなってゆく中で、「私は、生かされた」ということでした。たくさん罪も犯し、神様に対しても不誠実でした。にもかかわらず「私は、生かされた」ということでした。日野原先生が子供たちに「命って何だかわかる？時間があるということだよ」と言われましたが、2022年という新しい時間が与えられた、ということがとても感謝に思いました。

●盛岡みなみ教会の大塚史明牧師は、震災後10年を迎えてこんなことを書いています。「震災支援の現場で耳にしたのは、生きる気力がなくて…、なぜあの人は死んで、自分が残されたのか、死んでいたほうが楽だった。という声でした。…災害を経験しました。理由はわかりません。過去にも戻れません。ただ、今、確かなのは、「あなたはこれからどのように生きていきますか」という問いです。ある本に、人は、変えられるのは未来だけだと思い込んでいる。だけど、実際は、未来は常に過去を変えているんです、という一文がありました。…いかなる日々を編むかは、未来だけでなく、過去の自分や出来事を癒してゆく貴重な作業なのです。」

新しい年をどう生きるか、その生き方一つで未来も過去も生きるし、死ぬのなことなのです。「生かされた者」は、「生かされなかった者」の分だけ、使命が与えられたのだと思います。私の使命、キリスト教徒の使命とは何でしょうか。

②【神を待ち望む人たち】

イエス様は生まれて40日後に、初めて神殿に連れて行かれました。出産後のマリアに清めの儀式をするためと、幼子イエス様を神様にお献げするためです。さてエルサレムにシメオンという人がいました。シメオンは正しい人で信仰があつく、イスラエルの救いを待ち望み、聖霊が彼にとどまっていた。そして、メシアに会うまでは決して死なない、とのお告げを聖霊から受けていました。(25～26節) シメオンの人生とは救い主に会うことを目的としたものだったと言えるでしょう。ということは神の前に立つことが彼の人生の目標だったということです。世の人は神の前に立つことを考えて今を生きていません。しかし私たちは神の前に立ち、神に報われることを目標にして今を生きています。

シメオンはイスラエルの救いを待ち望んでいました。「私の魂は主を待ち望みま

す。」(詩編130:6)と詩編にあるように「神を待ち望むこと」は聖書全体を通して言われているテーマです。「待ち望む人たち」これがイスラエルの特徴です。しかしイスラエルの全ての民が待ち望んでいたわけではありません。多くの人は「待

ち望む」ことをやめてしまいました。そこで神は少数の待ち望む民を残されます。
「私は柔和にしてへりくだる民を、あなたのうちに残す。彼らは主の名を避け所とする。イスラエルの残りの者は不義を行わず、偽りを言わない。」(ゼファニア 3: 12～13 口語) シメオンやアンナは残りの民、イスラエルの末裔の象徴なのです。

●教会は今まで二千年の歴史の中で繰り返しパンデミックを経験してきました。一つ目は古代ローマ帝国で、人口の三分の一くらいが亡くなってしまふほど「はしか」が大流行しました。疫病によって感染者との接触が避けられ多くのコミュニティー（共同体・集団）が崩れてゆく中で、教会は感染者に対する看護を行い教会共同体というコミュニティーだけは崩れなかったというのです。中世にはペストが大流行しました。ルターはある牧師からこの町を去っても良いかと尋ねられた時「牧師などの職務にある人は、死の危険が迫ってきた時、そこに留まり、残る責任があります。…死に際して人は、…神の言葉と聖礼典によってその良心が強められ、慰められ、牧会を何よりも必要としているのです。」と答えています。教会共同体を壊してはいけないということなのです。

ヘブライ人の手紙 10 章 25 節には「ある人たちの習慣に倣って集会を怠ったりせず、むしろ励まし合ひましょう。」と書かれています。古代ローマ帝国ではキリスト教の集会は違法でした。にもかかわらず、教会は集まること（礼拝）をやめませんでした。コロナ禍でも私たちの教会は集会を守り続けてきました。今も「残りの民」はいると思います。「死ぬことなく、生きながらえて、主の御業を語り伝えよう。」(詩編 118 : 17) という言葉があります。生かされたのは、礼拝を続けることにより、神の救いの業を語り伝えるためだと思うのです。

②【聖霊は私たちがキリストに導いてくれる】

シメオンやアンナはイエス様に会ったことがありません。神殿の中には大勢の人がいたのに、どうしてイエス様のことが救い主だと分かったのでしょうか。それは聖霊が教えてくれたからです。25～27 節まで「聖霊が彼にとどまり」「聖霊から受け」「霊に導かれて」と、「聖霊」という言葉が三回も出てきます。鉄と磁石は同じ性質なので、お互いに引き合います。それと同じように、聖霊もイエス様も分かれざる一体の神なので、互いに引き合い、互いを教え合い、自分と同質のものの上にとどまるのです。人間は神を知ることはできません。神だけが神を知っています。私たちは同じものによって同じものを知るのです。だから聖霊を持つ人は、御子イエス様が分かるようになります。

●朝の 9 時の祈りに聖霊に対する祈りが出てきます。「第三時（9 時の事）にあなたの聖霊をあなたの使徒に遣わされた、この上なく善き主よ、これを私たちから取り上げないでください。願わくは、あなたに祈るわれらの内に、これを新しくしてください。」という祈りです。聖霊は神の霊であり、天と地をつなぐ唯一のお方です。この方は天から来て、地上にいる人間の中に住まわれます。この方が来

るので私たちは信仰を持つことが出来、聖書も理解し、イエス様を信じる事が出来るのです。「これを取り上げないでください」と祈っているということは、取り上げられることもあるということです。

聖霊は一度受けたら、もう二度と受けなくて良い、というものではありません。聖霊は私たちが求めなければ去ってしまいます。10人の乙女の譬えを聞いたことがあるでしょう。10人とも灯は持っていました、その内の5人だけが油を用意しており、後の5人は油を用意していませんでした。油が無ければ灯は消えてしまいます。花婿が遅くなり、油の用意の出来ていた賢い5人の乙女だけが宮殿の中に入れられたのです。灯は信仰であり、油は聖霊です。信仰はただで貰えますが、聖霊は私たちが準備しなければならないのです。聖霊がなければいただいた信仰を維持することは出来ません。私は10年前に水を飲んだから、もう飲まなくて良い、などという人を見たことはありません。水は毎日飲まなければ、人間は死んでしまいます。聖霊も同じです。毎日、受けなければ信仰は死んでしまいます。信仰を維持するためには、聖霊を求め、祈り、神の言葉を毎日読むという信仰生活をしなければなりません。女預言者アンナは神殿から離れず、祈り、夜昼、神に仕えていました。だからこそキリストの所に導かれたのです。

③【平安を得る秘訣～キリストを抱く～】

こうして彼が聖霊に導かれて神殿の境内に入ってゆくと、そこへ両親がイエス様を連れてきました。シメオンはすぐに幼子をメシアだと分かり、イエス様を腕に抱き、神をたたえて言いました。「主よ、今こそあなたは、お言葉どおりこの僕を安らかに去らせてくださいます。私はこの目であなたの救いを見たからです。これは万民のために整えてくださった救いで、異邦人を照らす啓示の光、あなたの民イスラエルの誉れです。」(ルカ 2:29~32) これはヌンク・ディミティスといわれ、晩課で歌われるようになりました。晩課とは寝る前の祈りです。彼は「私はもうこれで安心してこの世を去る(死ぬ)ことができる」といったのです。彼の平安がいかに大きかったかが分かります。ここに平安を得る秘訣があります。

●私は朝の祈りの時に、祭壇の前に立って祈るとものすごい平安がやってくるのです。これがなぜなのか、分かりません。修道院はうらやましいです。高齢になっても聖堂に連れて行ってもらえるし、死の直前まで祈祷や賛美が聞けるし、旅立ちの時も詩編や讃美歌を聞きながら死ぬるのです。人は神に対して大きな誤解をしています。「神は私を愛して下さるだろうか、私を赦してくれるだろうか」つねに不安が襲ってきます。しかし祈っているとその恐れが消えてゆくのです。自分が立派になったからではありません。罪を犯さない人になれたからでもありません。神の愛を信じる力が強くなるからだだと思います。シメオンのようにキリストをはっきりと見る、キリストに出会う、キリストを抱くことが平安を得る秘訣なのです。だから聖餐など、キリストが体内に入りますから、平安を得るとても強い方法なのです。

老人シメオンは死すべき人間の象徴です。一方幼子イエス様は死なない命の象徴

です。老人シメオンは、幼子イエス様をその手に抱きました。小さな幼子を、大きな大人が抱いているのですが、本当はその逆で、キリストがシメオンを抱いているのです。命が死を抱き、永遠に死なない巨大な大木であるキリストに枯れ果てた人間が接ぎ木されて生き返るのです。キリストを信じる人は、このように歴史の中で脈々と流れ、つながっている永遠の神の命につながって生きる人なのです。年月も世も移り変わりますが、変わることにないキリストにつながるのです。これに勝る喜びと平安はありません。